

著者からの報告

——華麗島から東アジアの比較文学へ——

橋本恭子

はじめに

ここで、拙著『『華麗島文学志』とその時代——比較文学者島田謹二の台湾体験』（三元社、2012年2月）の内容について簡単に報告するが、分量が多いため、出発点にあった問題意識とそれを基に設定した課題，そこから導かれた結論という順序で述べてみたい。その前に島田謹二（1901-1993）の略歴，および『華麗島文学志』について，簡単に紹介しておこう。

島田は明治34（1901）年東京に生まれ，東京外国語学校英語科を経て，1925年東北帝国大学法文学部英文学科に入学した。同校卒業後の1929年，前年に創設されたばかりの台北帝国大学文政学部講師として赴任する。1940年には台北高等学校教授となるも，44年には陸軍司令官として日本占領下の香港に赴き，香港大学図書館の蔵書管理の任にあたった。戦後引揚げてからは，第一高等学校教授を経て，1946年東京大学教養学部教授となり，1953年より定年まで同大学院比較文学比較文化課程の主任を務め，比較文学という新しい学問を日本に定着させ，多くの優れた後進を育成した。

台湾時代の島田は，専門のフランス派英文学や比較文学の研究に励む傍ら，1935年頃から台湾の日本文学に興味を抱き，『華麗島文学志』という標題の下，膨大且つ詳細な論考を執筆し，『台湾時報』や『台大文学』などに次々と発表した。それには，漢詩や短歌・俳句など，文芸ジャンルごとの発展史をはじめ，台湾に関わった森鷗外・羽山衣洲・伊良湖清白・佐藤春夫等の作家論や詳細なテキストクリティークを施した作品論，さらに全体を俯瞰した明治期から昭和10年代に至る在日台日文学史などが含まれる。この研究の特長は，イギリス人やフランス人の手になる台湾関連の作品についても目配りを怠らず，フランスの植民地文学研究を参考に，世界の植民地文学の広がりの中で，台湾の日本文学を捉えようとした点にある。まさに，比較文学者の壮大な仕事といえよう。

戦前の外地文学研究において，質量ともに他に類を見ない島田の『華麗島文学志』は，1940年代の台湾文壇に多大な影響を与えただけでなく，現在に至るまで様々な議論を引き起こしている。拙著は同書を対象に，島田謹二の台湾体験の意味を探ったものである。

一、問題意識

本研究は，当初，台湾の清華大学大学院で修士論文として着手されたため¹⁾，読者には台湾人

を設定し、彼らとの対話を目標としていた。その後、博士課程は日本に戻り、博士論文でも引き続きこれを研究テーマとしたのだが、日本に帰ってきた以上、「台湾文学」の文脈だけでなく、島田自身が育てた「比較文学」というフィールドの中で考えてみたいと思うようになり、読者には日本人、特に比較文学者を設定した。そこで、日本人比較文学者による『華麗島文学志』関連の先行研究を調べたところ、研究はもとより書評も引用も少なく、愕然とさせられたのである。というのは、台湾では戦前の文学を研究する上で、同書は欠かせない論考とされ、発表当初から今日に至るまで盛んに議論されてきたからだ。ところが、日本の比較文学界では、無視あるいは抹殺に近い扱いで、この温度差はいったい何なのか、疑念を抱かざるをえなかった。

ただし、台湾人研究者の議論も誤解に基づいた批判が大半であり、その論調は、実は戦前から近年までほとんど変わっていない。日本の比較文学者との間にコミュニケーションが欠けていることも明らかであった。そこで、両者の間に橋をかけ、『華麗島文学志』をめぐる日台の不均衡な状況を変えたいと考え、それをひとつの目標として、本研究を進めることにしたのである。

さらに補足すると、台湾人研究者の批判は、冷静な批判というよりも、鬱憤晴らしに近く、彼らの言葉の端々からは、島田に対する恨みや憎しみ、嫌悪の情など、生々しい感情が伝わってきた。それを真摯に受け止め、対処するには、冷静で客観的な研究を進めるしかないと思い、実証研究とテキストクリティークに力を入れることにした。

一方、島田自身、『華麗島文学志』は比較文学研究であると述べていたこともあり、それを近代日本比較文学史に位置づけて評価／批判すると同時に、本研究を通して「比較文学」とは何か、学問の原点についても考えたいと思った。また、台湾人研究者から厳しく指摘されている同書の植民地主義についても、「台湾」という外部からだけでなく、比較文学という学問に内在する問題として捉え直すことにした。

以上が出発点にあった基本的な問題意識である。

ここで台湾人研究者の批判について補足しておくが、実は、彼らの批判は、批判としてはほとんど機能していない。というのは、『華麗島文学志』が正しく理解されていないからである。台湾では、同書は台湾人の文学を無視した「台湾文学史」であるとの認識が一般化し、その点にのみ批判が集中してきたのであるが、島田自身明記しているように、それは「台湾文学史」ではなく、台湾における「日本文学史」である。一方で、その「日本文学史」で島田は何を論じようとしたのか、その点はさほど問題にされてこなかった。つまり、従来の批判では、台湾人の文学について何も「書かれていない」という点のみが問題視され、実際「書かれた」ことに対してはなされるべき議論が回避されてきたのである。当然、批判は的をはずし、生産性を欠くことになった。

こうした問題が生じたのは、単にテキストが読まれていないからである。島田が1941年に発表した論文に「台湾の文学的過現未」があるが、従来の議論はこれ一篇にのみ集中し、他の膨大な論考にはほとんど注意が払われてこなかったのだ。確かに、「台湾の文学的過現未」は『華麗島文学志』の結論部に当たる論文なので、これ一篇に議論が集中した理由はわからないでもないが、残念ながらそれによって見えなくなった問題の方が多い。

さらに、『華麗島文学志』のまっとうな評価なり、批判なりを阻んできた一因として、それが歴史的に位置付けられてこなかった点が挙げられる。というのは、同書が1930年代後半に書か

れた論文集であるにもかかわらず、これまで1940年代の台湾文壇を背景にしてしか議論されてこなかったからである。確かに同書の反響が現れたのは40年代ではあるが、書かれたのは30年代後半であり、わずかの数年の違いとはいえ、この間に文学をめぐる状況は一変したのであった。30年代、日本人と台湾人は別々に文芸活動を行っていたが、39年に西川満を中心に両者を糾合した全島的な文壇建設の準備が進められ、40年1月、雑誌『文芸台湾』が刊行されるのである。以後、戦時下にも関わらず、台湾の文学活動は活況を呈したのであった。

実は、『華麗島文学志』というのは、1935年前後から徐々に準備され、39年という新生文壇の準備段階において集中的に発表されたところに大きな意味があるのだが、従来の論者は、40年代の状況を背景に「台湾の文学的過現未」一篇を論じるばかりで、30年代の状況には目をつむってきた。そのため、彼らの批判は、言葉の鋭さとは裏腹に的はずし、真に批判すべき点は見過ごされてきたのである。私は、台湾人の『華麗島文学志』批判や島田批判は、日本の比較文学に見直しを迫るようなものでなければならないと考えているが、実際はそのようなレベルとは程遠く、島田への鬱憤が台湾文学研究の閉じられた小さな圏域で旋回しているだけに見えた。そこで、彼らの声を外に出して、日本の比較文学者に届けたいと考えるようになったのである。

二、課題の設定

次に、上記のような問題意識を出発点に、課題を三つ設定することにした。

第一に、『華麗島文学志』を近代比較文学史に位置付けて、比較文学とは何かという問いのなかで考えるということ。特に、ヨーロッパ近代比較文学の形成期まで遡り、それが日本、あるいは台湾で受容された経緯を、『華麗島文学志』を一種のケーススタディとして見ていくことにした。

第二に、1930年代後半の台湾史に着目し、『華麗島文学志』の誕生を促した在台日本人社会の状況と時代精神を探ること。

第三に、台湾人文学者の批判が「書かれていないこと」に集中していたことを受け、本研究では「書かれたこと」について検討すること。特に、島田が提起した外地文学の三つの課題に焦点を当てること、である。それは、「郷愁・エグゾティスム・リアリズム」の三点であるが、島田は、台湾の日本文学はこの三つのテーマに沿って、発展していかなければならないと述べていた。

従来、「エグゾティスム」だけは、島田と親しかった詩人西川満（1908-1999）²⁾とセットにする形でかなり批判的に論じられてきたが、両者の概念には重なる部分も、隔たりもある。一方、「郷愁」と「リアリズム」については、非常に重要な概念であるにも関わらず、これまでほぼ問題にされてこなかった。それゆえ、ここで一度、議論する必要があると考えたのである。

こうした展望のもとに、本書の構成を次のように設定したのだが、以下に大まかな章立てと概要を記す。

序章 沈黙と誤解から理解へ

第一章 『華麗島文学志』読解の手がかりとして―「比較文学」とは何か

- 第二章 『華麗島文学志』の誕生
- 第三章 『華麗島文学志』とその時代—郷土化・戦争・南進化
- 第四章 「外地文学論」形成の過程
- 第五章 『華麗島文学志』の受容—1940年代の台湾文壇と島田謹二
- 第六章 太平洋戦争前夜の島田謹二—ナショナリズムと郷愁
- 終章 二つの文学史における『華麗島文学志』の意義

「序章」では、『華麗島文学志』をめぐる日本人比較文学者の「沈黙」と台湾人文学者の「誤解」を乗り越えて、十全な「理解」を目指し、批判すべき点と評価すべき点を探ろうと提起した。

第一章では、『華麗島文学志』読解の手がかりとして、まず「比較文学」の定義を確認するところから始め、前半では、島田が学んだ兩大戦間のヨーロッパ近代比較文学について、形成期の理念や研究の方法、発展の過程を明らかにし、後半で、それが1930年代の日本、あるいは台湾で受容された経緯を論じた。

第二章からは舞台を台湾に移し、これまでの誤解を解くことを第一の目標として、島田が『華麗島文学志』執筆に至った経緯や全体の構成、論点などを整理し、キーワードである台湾文学、外地文学、植民地文学の概念を明確化した。

第三章は、書名と同じく「『華麗島文学志』とその時代」と題したとおり、特に重視した章である。ここでは、『華麗島文学志』の誕生を促した時代状況と、在日日本人が育んでいた時代精神を明らかにしたいと考え、分析概念として、「郷土化・戦争・南進化」を導入した。「郷土化」は在日日本人社会の土着化、「戦争」は日中戦争、「南進化」は帝国の南進政策を指す。

第四章は、島田がフランスの植民地文学研究を参考に、台湾の状況に合わせて、現在、一般に「外地文学論」と呼ばれる『華麗島文学志』の理論的部分をいかに構築したか、その過程をたどった。エグゾティスムやリアリズム、郷愁の概念についても、ここで説明した。

第五章は、『華麗島文学志』が1940年代の台湾文壇に投げかけた反響について論じた。この時期、台湾の文学をめぐる状況は一変し、それにともない、「台湾文学」や「外地文学」の概念も変化した。島田は41年に発表した論文「台湾の文学的過現未」で、こうした状況にうまく対応できなかったため、現在にまで至る誤解を生む。問題の所在を明らかにした後、やはり島田の論考によって惹起されたエグゾティスムとリアリズムをめぐる論争について、その経緯を整理した。さらに、島田の台北帝大の教え子黄得時が島田に対抗して立ち上げた台湾文学史と島田の在日日本文学史を比較し、両者の文学史観を分析した。

第六章は、島田のナショナリズム観と郷愁のテーマを論じた。島田は戦後、秋山真之や広瀬武夫など帝国海軍軍人を対象にした明治ナショナリズムの研究で独自の分野を切り開くが、私はその萌芽を、『華麗島文学志』の中で最も大部の論文「南菜園の詩人朧山衣洲」³⁾に見ている。これを詳細に読み解くことによって、島田のナショナリズムを分析すると同時に、同論文では、在日日本人の郷愁も大きなテーマになっているため、島田の他の論考や、明治期以来の在日日本文学を幅広く参照しながら、「郷愁」の種々相について考察した。

終章では、近代日本比較文学史と台湾文学史という二つの文学史における『華麗島文学志』の意義をまとめた。

これが全体の構成である。

三、三つの課題

(1) 近代比較文学と『華麗島文学志』

続いて、出発点に設定した三つの課題について、より詳しく述べてみたい。

第一に、『華麗島文学志』を近代比較文学史に位置づけるという課題であるが、そのためにまず、「比較文学」とは何か、ヨーロッパ近代比較文学の原点にさかのぼって考察することにした。本研究を、『華麗島文学志』についての考察であると同時に、比較文学という学問そのものを全体で問い直した、一種の学問史研究にしたかったのである。

比較文学の起源は、ヨーロッパでは18世紀にまで遡るが、近代的な学問として確立したのは、第一次世界大戦直後から第二次世界大戦にかけての、いわゆる两大戦間であった。フランスを中心に、学術誌『比較文学雑誌』（Revue de littérature comparée）を舞台として発展するが、第一次大戦の原因となった極端なナショナリズムへの反省から、同誌は国際連盟や知的協力国際委員会などと同様、文化国際主義の精神を掲げて出発する。創刊号では、文学の国際主義的な研究をとおして、排他的ナショナリズムを克服し、新たなユマニズムを準備しようと高らかにうたっていた。ただし、ヨーロッパを再び戦場にしてはならないという比較文学者の危機意識は、相対的にヨーロッパ中心主義や植民地に対する無関心を生み、島田ら1930年代に比較文学に接した日本文学者は、その点を微妙に感じ取っていた。

ヨーロッパの比較文学にこうした克服し難い矛盾が内在していたのは事実であるが、それでもこの時期の『比較文学雑誌』を通読すると、やはり青春期にある学問の美しさや、学者たちの情熱が直に伝わってきて、文句なく感動させられる。それまで私は比較文学に対して、勝手な思い込みを抱いていたが、それをいい意味で覆されたのであった。それは実際、思いがけない衝撃であり、比較文学とはいったい何か、学問の原点を再考する契機にもなった。

さて、このように高い理想を掲げて出発したヨーロッパの学問であるが、それが日本に受容されたのは、1930年代初頭であった。それに関わったのは、島田謹二の他、野上豊一郎や吉江喬松、小林正、太田咲太郎らである。ただし、満州事変勃発後の国家主義や日本主義が吹き荒れた時代にあって、ヨーロッパ比較文学の最良の部分、つまり理念的な部分は残念ながら導入されることはなかった。

そもそもフランスの比較文学者にとって最も気がかりだったのは、ドイツとの関係であり、両国間に醸成された憎悪や極端な愛国心を取り払い、寛容の精神を育成しなければならないという使命感は、両国の比較文学者に共有されていた。島田謹二ら日本の文学者もそれを十分理解していたと思われる。だからといって、比較文学という学問の導入によって、日本と近隣諸国との関係を再考しようとしたわけではない。そもそも、満州事変から日中戦争へと日本帝国が東アジア進出の野望を膨張させていた時代に、日本文学者が中国や台湾、朝鮮の知識人とともに平和主義を掲げて知の共同体を構築し、寛容の精神を育成することなど、ほぼ不可能であったろう。むしろ、そのような無謀な試みは避けて通りたいというのが本音ではなかったであろうか。その結果、比較文学の理念の部分はすっぽり抜け落ち、無難な影響研究や一般文学研

究の方法のみが受容されたのである。

では、島田謹二が15年戦争下の植民地台湾で、比較文学をどのように受容したかと言うと、『華麗島文学志』はそれを探るのに最もふさわしいテキストではないだろうか。それはまさに比較文学の実験場であり、比較文学の方法がどのように運用されたのかが如実に見て取れるのである。だがやはり、理念の部分は欠落していた。

本報告前の導入部で西成彦先生が島田の論文「台湾の文学的過現未」に言及され、引用していらしたが⁴⁾、その一節を以下に紹介してみたい。

広く世界の文学史を見よ。ParisやLondonや東京にのみ文学の美花は咲くのではない。或は Provence に、或は Ireland に、或は Algérie に、或は Nicaragua に、特異な花卉は生い立つた。〔中略〕故に台湾の文学はむしろパリやロンドンの都会文学の模擬ではなく、おのれと同じ立場にある他の外地文学を究め、その功罪を明らかにし、もしそこに学ぶべき点を見出しえば、それらをこそ参考して、独自の文学——少なくとも日本文学史上例類なき、しかも有意義なる現代文学の様式を創成するがよいと信ずる。(島田謹二「台湾の文学的過現未」、『文芸台湾』、1941年5月、14頁)

アルジェリアやニカラグアなどを挙げていることから明らかなおとおり、島田は「一般文学」(littérature général) 研究の方法により、世界の外地文学(植民地文学)という大枠の中で台湾の日本文学を捉えようとしていた。「一般文学」とは、二国間の文学を扱う「比較文学」をより広い範囲に拡大し、「諸国をまたいでひとつのグループを形成している様々な事実を全体的に研究する」方法である。

島田が在台日本文学の研究にこの方法を導入したということは、一國文学の論理を越えて、文学の国際主義的研究を試みた、ということの意味する。だがそれは、あくまで世界の植民地統治者の文学と連携を図ることであり、その一方で、島田は被統治民族である台湾人の文学とは一線を画し、彼らとの連帯は拒んだのであった。

西先生が先ほど、先住民族の文学とヨーロッパ人植民者の文学を区別したこと自体、方法論として誤りではなかったし、この区分は世界の帝国主義の文学を見るときに一定の有効性を持つだろうと述べておられたように、島田謹二が日台の文学を区別したことは一概に悪いとは言えない。時代的に見てそうせざるを得なかった部分もあるし、実際、1930年代の台湾では、日本人と台湾人は別々に文学活動を行っており、両者を分離して考察することがむしろ一般的であったのだ。

一方、比較文学の精神は複眼だと言いながら、島田の「複眼」がアジアとヨーロッパに均等に働いていなかったことも事実であり、台湾人の文学に対して冷淡で無関心であったことは否定できない。それはまた、比較文学という学問の原点から見た『華麗島文学志』の限界でもあるが、詳細は後述する。

(2) 1930年代後半の台湾史と『華麗島文学志』

次に、『華麗島文学志』の誕生を促した時代背景と、1930年代後半の在台日本人の時代精神に

ついて見ていくが、それを明らかにするため、本研究では「郷土化・戦争・南進化」を分析概念として導入した。

まず、「郷土化」とは、在台日本人社会の土着化を指す。領台40周年を迎えたこの時期、永住を覚悟した長期居住者の他に、台湾生まれの、いわゆる「湾生」も増え、台湾の日本人社会は確実に土着化していった。それにともない、在台日本人の台湾認識も変化し、「台湾はもう植民地ではない。私たちの郷土である」という「郷土意識」や「台湾意識」が醸成される。浅野豊美氏の優れた書評が早くから指摘していたように、『華麗島文学志』にも濃厚な「在台湾意識」が見て取れるが⁵⁾、島田もまた台湾永住を念頭に置いていた。

文学の方で「郷土意識」を最も鮮明に打ち出していたのは俳句で、全島規模の俳誌『ゆうかり』を中心に早くから地方主義を標榜する動きが見られた。1933年には、西川満も早稲田大学の恩師吉江喬松から「地方主義文学のために一生を捧げよ」との言葉を受けて、帰台する。島田が、『華麗島文学志』に着手した背景には、こうした在台俳人や西川らの「地方主義」への情熱があったことは確かであり、島田は彼らから大いに刺激を受けると同時に、彼らをサポートしたいと考えたのであった。

次に「戦争」だが、これは日中戦争を指す。これも在台日本人の文芸意識を大きく変える契機となった。1930年代、台湾の文学活動は、一時、プロレタリア文学の傘下に日本人と台湾人が参集したことを除き、民族別に行われていた。台湾人の文学運動はもともと植民地支配への抵抗を目指した政治運動から派生したため、社会的な意識が強く、リアリズム小説が主流であった。一方、在台日本人の文学は短歌や俳句が中心で、趣味的傾向が強く、植民地という文化の不毛地帯で心豊かに過ごすための一種の方便と考えられていた。ところが、戦争の勃発により、趣味の文学は報国の文学へと一変するのである。ただし、そのころには文芸家たちの意識にも成熟が見られ、いくら「お国のため」とはいえ、一定の水準に達していないものは批判の対象となり、前線の兵士たちに恥じないような質の高い作品が求められた。日中戦争をきっかけとした社会の緊張感は、在台日本文芸家により真剣な創作態度を求めたが、島田は数々の論考によって、彼らに文芸のあり方を再考させ、目指すべき方向性を与えたのであった。

一方、戦争勃発後、皇民化運動が推進され、台湾人に対して「国語」の使用や改姓名が要請されたり、台湾の伝統的な風俗習慣が廃止されたりしたが、台湾に長期居住する日本人や湾生はそれに対して全面的に賛同することはなかった。特に日本文芸家にとって、台湾の伝統文化はすでに自分たちの文化資本になっており、それらが消滅することは、地方主義文学の拠り所を失うに等しかったのである。島田も日本文芸家に向けて、台湾の言語や習慣、宗教、思想に精通するよう、呼びかけていた。

さらに、帝国は「南進化」を進める。それまで台湾は日本帝国の南の果てと認識され、台湾への移住は往々にして「敗者の台湾落ち」と見なされていたが、南進政策によって、台湾は南進基地として帝国日本の中心に位置づけられた。在台日本人は南進ブームの熱狂に沸き立ち、文芸家もそれに乗じて、台湾を南方文化の中心にすべく、奮闘する。まさに、この南進ブームがピークに達した1939年に、『華麗島文学志』関連の論考が集中的に発表されたという点は注意すべきであり、島田も南方外地文学の育成を鼓舞したのであった。

それはちょうど、それまで台湾文芸界の主流を占めていた台湾人の文芸活動が日中戦争勃発

後の不安定な状況下で失速せざるを得なかった時期であり、それに代わって、日本文芸家が主流になりつつあった時期でもある。そのような時期に現れた島田の論考は、従来にはない質と量を備えた体系的なもので、日本文芸家の力関係の逆転に大いに寄与したのであった。

それを考えると、『華麗島文学志』というのは、1930年代末期の日本文芸の転換期に意味を持った論考であり、それを40年以降の再編された台湾文壇だけを背景に見ていくと、読み誤る可能性が高い。やはり30年代後半の時代状況に置き直して考えるべきであろう。

(3) 「外地文学」の三つの課題の再検討

続いて、島田が挙げた外地文学の三つの課題「エグゾティスム・レアリスム・郷愁」の再検討に入ろう。島田はフランスの研究書から⁶⁾、世界の外地文学でもこの三点がメインテーマとなっていたことを引き出し、明治以降の在日台日文学でもエグゾティスムと郷愁が大きな流れを形成していたと見ていた。ただし、レアリスムは充分育っていなかったため、今後の在日台日文学は、この三点を課題とすべきであると主張したのである。

そのうち「エグゾティスム」については、西川満のエキゾチックな作風と同一視され、内地の読者に媚を売り、内地文壇に進出するための手段ではないかと、厳しい批判を受けてきた。島田と西川の「エグゾティスム」観には確かに重なる部分もあるが、ずれもあり、西川も島田のいう概念を全面的に代表していたわけではない。島田にとってエグゾティスムとは、簡単に言えば、「台湾」を主題として美しく歌い上げることであったが、それは単に内地に媚びるための「台湾の美」というより、在日日本人の美意識の変化から必然的に生まれた主張であった。

それまで台湾は、内地の文学者から「不潔・野蛮・危険」といったネガティブなイメージで語られ、しかもそれは1895年の領有直後から島田が『華麗島文学志』に着手した1930年代後半に至るまで少しも変わらなかったのである。しかし、台湾に長期居住する日本人にはそれが不満であり、内地から一方的に押し付けられるイメージを変えたいという思いは強かった。彼らの中には、台湾は不潔でも野蛮でもなく、美しい郷土であるという意識が確実に育っていたのである。

実際、南進化時代に入って、在日日本人の台湾観は変化していた。北方＝内地からの圧力により、南方＝台湾に生きることは彼らにとって一種のコンプレックスになっていたが、南進政策は台湾に優位性をもたらし、内地への対抗意識を育むのである。「台湾は美しい」という主張もその延長線上にあり、島田は「南方外地文学」に、内地の「北方文学」を凌駕すべき使命を負わせていた。

実は、「レアリスム」の主張にもこれと似たような構造が見られる。領台以来、内地から台湾にきた旅行者などが様々な旅行記や印象記を発表していたが、1930年代になると、「彼ら」の書く台湾など嘘ばかり、という批判が在日日本人の中から噴出するのである。内地の「彼ら」と台湾の「われわれ」の間には線が引かれ、真の台湾を理解し、正確に表現できるのは「われわれ」だけであり、それを内地に向けて発信すべきだという主張が、あちこで叫ばれるようになっていた。

つまり、レアリスムの主張というのは、台湾の生活者である「われわれ」が内地に対して何を発信していくべきか、いってみれば、在日日本人のアイデンティティーに関わるような問題

意識と結びついていたのである。ただし、植民地でリアリズムを追究するということは、どうしても植民統治の根幹に関わるデリケートな部分に踏み込まざるを得ず、必然的にある種の آپリアを抱え込むことになる。それもあってか、島田のリアリズム論は空論の域を脱することができず、成熟しないまま終わってしまうのである。そうした中途半端さが当時の島田の限界でもあった。

「郷愁」のテーマについても同様の限界が見て取れる。実は、在台日本人の「郷愁」というのは、単なる内地に対する望郷の念ではなく、植民地という特殊な社会で生活する宗主国人が抱え込まざるを得ない憂鬱や不安、孤独や緊張感など、諸々のマイナス感情の総体であった。在台日本人の生の根幹に関わる重要なテーマでもある。それは、植民地特有の畸形的な環境から生まれる病理であり、それゆえ、「郷愁」のテーマを掘り下げていけば、植民地社会の特殊な構造が浮かび上がるはずであった。ところが島田は、それを深く追究することなく、台湾で寂しく生きる者たちの慰めの文学、慰安の文学に帰してしまうのである。

実際、「エグゾティスム・リアリズム・郷愁」という三つの課題は、植民地の宗主国人が日々の生活の中で向き合ざるをえない極めて現実的で切実な課題であった。それは世界の植民地文学に普遍的なテーマであると同時に、台湾に生きる日本人一人ひとりの内在的な問いでもあったのだ。それを島田謹二が取り上げて文学の課題としたことは、正しい選択であり、卓見であった。しかし残念ながら、どれも深く追究されることなく終わってしまうのである。

それは島田に限らず、在台日本人の限界であったかもしれない。だからこそ、この点は今後引き続き取り上げ、議論を深めていかなければならないと思う。

最後に結論部であるが、本研究によって確認できたのは、まずなによりも、『華麗島文学志』が在台日本人に芽生えた「台湾意識」によって書かれた文学史であったという点である。そこからは、内地の文壇にいつまでも従属するのではなく、台湾独自の文学を主体的に立ち上げようというアピールが力強く伝わってくる。もちろん、現在の時点から見て、イデオロギー上の問題や限界は明らかだが、在台日本人の精神史を確実に捉えたという点では優れた文学史であり、これだけ体系的な在台日本文学研究は他に類を見ない。

また、比較文学研究の実践という点から見た場合、台湾の日本文学を世界の外地文学の中で捉えようとした点は出色であり、同時代の文学研究には見られない壮大なパースペクティブを備えている。方法的にも、一般文学研究や影響研究、エクスピリカシオン、伝記研究の方法など、様々な方法が試され、テキスト内部の詳細な読みと外部の歴史的な実証研究がバランスよく組み合わされている。戦前の比較文学研究の達成がここにあるとっていい。現在、日本の比較文学は曲がりなりにも大きく成長し、豊かな成果を産みだしているが、その出発点に島田のこうした試行錯誤があったことは確かであり、その点でも十分評価していいだろう。

もちろん問題はある。第一に指摘すべきは、西洋と東洋に対するまなざしや態度の違いである。島田謹二が日本派比較文学を立ち上げようとした根底には、文学の国際主義を掲げながら、根強いヨーロッパ中心主義を克服できないヨーロッパの比較文学に対する批判があった。ところが島田は、日本とヨーロッパを対等に置きたいと願いつつ、中国や台湾はあくまで日本の下位に位置づけようとするのである。そのため、西洋を最上位に、その下に日本、さらにその下に他のアジア諸国を、という序列を崩すことができなかった。

アジアを一段下に見るということは、当然植民地主義の肯定につながるが、一方で西欧的価値を認め、西欧との連帯を図ろうとする態度は、島田の中で国家主義や戦争への批判につながっていった。太平洋戦争勃発後、台北帝大の教員たちは大半が戦争賛美に走るが、島田は沈黙を守る。積極的な批判や反対ではなかったものの、彼が国家主義に対して一線を画していたことは確かであった。日中戦争とは異なり、西洋諸国とは戦いたくないという思いがあったのかもしれない。こうした島田の西洋と東洋に対する態度の違いは戦後にも持ち越され、比較文学のあり方に暗い影を落とすことになった。

その意味で『華麗島文学志』というのは、島田の功罪が如実に刻印されたテキストなのである。特に、マイナスの部分が生々しいかたちで息づいているためか、戦後の比較文学者はあえて語ろうとせず、極力避けて通ろうとしたのかもしれない。しかし、今後の比較文学を考える際、それに目をつむったままではいけないだろう。

最後に今後の研究課題を述べて終わりにしたい。第一に、『華麗島文学志』が私たちに残した課題を引き続き考察していく、ということである。ここには新たな研究の道を開いてくれるような多くの課題が依然として残されており、それを深めることで、より完璧な在日台日文学史が描けるはずである。戦前の台湾文学研究のうち、日本文学の部分が遅れていることもあり、島田の基礎研究を有効に、あるいは批判的に活用した、新世代の研究が望まれる。

次に、『華麗島文学志』の「外編」といわれる部分、つまりイギリス人やフランス人の手になる台湾関連の小説やルポルタージュについて、島田は五篇の論文を残しているが、本書ではそこまで扱う余裕がなかった。これを検討することで、世界の中の台湾像がより明確になるであろうし、それらとの比較を通して、在日台日文学の特質も見えてくるはずである。

最後に私にとって最大の課題は、やはり島田謹二や台湾文学の研究を通して、「比較文学」という学問の在り方を問い続けることである。近代比較文学はヨーロッパという「場」、両大戦間という「時代」を成立の条件とした、ある意味、極めてローカルな学問であったが、日本の比較文学者はそこから何を普遍的な理念として引き出し、継承していくべきなのだろう。

両大戦間のヨーロッパの比較文学者は、新たな戦争がいつ勃発するかもしれないという危機的な状況と向き合いながら学問を鍛えていったわけだが、学問として人を感動させる力は、まさにその点に宿っていた。2012年秋、日中関係や日韓関係が一挙に悪化した中で、私は、これはどこかで見た光景ではないかと一種の既視感を覚えたが、戦間期の仏独の比較文学者たちはこれと似たような状況下で学問のあるべき姿を模索していたのではないだろうか。混迷を極める東アジアの現状を目の当たりにして、私たちは比較文学という学問のあり方を再考せずにはいられない。

その際のキーワードとして、私はあえて「ユマニズム」を挙げておきたい。先述の『比較文学雑誌』創刊号のマニフェストに、比較文学とは「新しいユマニズムの準備」であると宣言されていたが、残念なことに、それは現在に至るまで実現されていない。そもそもヨーロッパ人の説くユマニズムなど、植民地出身の作家から見れば⁷⁾、不完全なものであった。戦後、ルネ・エチャンブル (R.Etiemble) は、「比較文学、それはユマニズムである」(La littérature comparée, c'est l'humanisme)⁸⁾と述べているが、その内実については多くを語っていない。21世紀のユマニズムをいかに実現するか、それは比較文学者ひとりひとりが向きあうべき課題で

あろう。

注

- 1) 『島田謹二《華麗島文学志》研究－以「外地文学論」為中心－』, 台湾国立清華大学中文研究所, 修士論文, 2003年1月。
- 2) 会津若松市の旧士族の家庭に生まれ、満2歳のとき一家で台湾に渡った。父親は昭和炭鉱の社長で台北市会議員。1925年に台北一中を卒業、27年、内地に戻って早稲田高等学院に学んだ後、1930年に早稲田大学仏文科に入学した。1933年、同校卒業と同時に台湾に戻り、翌年、台湾日日新報社に入社し、久しく中断していた文芸欄を復活させた。同年、媽祖書房を創設し、詩誌『媽祖』を創刊する。西川は文芸団体の組織化なども積極的に進め、1939年12月には台湾人文芸家と共に「台湾文芸家協会」を組織し、40年1月には機関誌『文芸台湾』を創刊した。1940年代には、文字通り台湾文壇のリーダー的存在であった。
- 3) 初出は、『台大文学』。発表時期は、(上)1940年10月、(中)1940年12月、(下)1941年5月。戦後、『日本における外国文学(下)』(朝日新聞社、1976年2月)に収録された。
- 4) 西成彦「日本語文学の越境的な読みに向けて」、『立命館言語文化研究』22巻4号、立命館大学国際言語文化研究所、2011年3月、182頁。
- 5) 浅野豊美「台湾に関する本100冊、15 島田謹二『華麗島文学志』－日本詩人の台湾体験」、『台湾史研究』13、台湾史研究、1997年。
- 6) 島田謹二が主に参照した文献は以下の通り。Louis Cario et Charles Regismanset, *L'Exotisme : la littérature coloniale* - 2^e ed., Paris : Mercure de France, 1911. Roland Lebel, *Études de Littérature Coloniale*, Paris : J. Peyronnet et Cie, 1928. Roland Lebel, *Histoire de la littérature coloniale en France*, Paris : Larose, 1931.
- 7) エメ・セゼール著、砂野幸稔訳『帰郷ノート・植民地主義論』(平凡社、2004年5月)192頁。
- 8) René Etiemble, *Comparaison n'est pas raison*, Paris : Gallimard, 1963, pp.20-23.

